

明治の精神

鎌田 純 一

今年平成二十五年十月には、神宮の第六十二回式年遷宮両正宮遷御の儀が斎行される運びであり、また五月十日には、出雲大社御本殿の修理を滞りなく終えられ、御仮殿より遷御の儀が斎行されて、この唯一神明造りの神宮、大社造りの出雲大社のこの御儀で、国民が喜び、改めて神宮神社の御社殿の造営に深く思いを致すところとなつたと云えよう。

その五月の出雲大社の御儀に続いて、奉祝祭、例祭、御神楽ほかの諸行事に参列した人々、出雲地方ならではの雰囲気とうけとめさせて頂いたと、感激して話していただくことでもあり、国民の心への影響、深く感じたところでもある。

神宮の二十年を限つての造替遷宮、それは『古事記』『日本書紀』撰上に深くかわられた天武天皇が定められたこと、史書に記されるところであるが、そこにも深く思いを致させて頂くべきであらう。

出雲大社、この大社にかかわる出雲神話、それは、国民それぞれが幼年のころより明るく親しみをもって覚えてきたところであるが、その出雲大社の御造営の姿、出雲国造家文書などより、また発掘調査より、その偉大さ、驚きをもつてみられるところである。また昭和五十九年（一九八四）斐川町の荒神谷より、一挙に三百五十八本の銅剣が出土、さらに翌昭和六十年（一九八五）にはほぼ同地より、銅鐸六個、銅矛一個が出土したこともあり、さらに出雲地方を改め

て考えさせられたとも云えよう。

現在の出雲大社御本殿は、それらのあと、寛文七年（一六六七）の造営、さらに延享元年（一七四四）建立、現在国宝とされるが、明治十四年（一八八二）、昭和二十八年（一九五三）の修理遷御をうけられての御本殿である。この御本殿の維持に、また祭祀に、出雲国造、すなわち天穂日命の子孫出雲国造が代々継承されてきたこともよくみられるべきであろう。明治十九年（一八八六）、その出雲国造家の出雲大社宮司千家尊福は、東京でも神道教導職副管長ほか要職につき活躍していたが、その時代のなかで、大社社殿の規模を維持し、神徳を発揚せんことを計り、出雲大社保存会を組織した。これが叡聞に達し、明治天皇は特旨をもって、賜金を寄せられることもあったのである。

今年、神宮神社の御社殿造営について、改めて広く過去よりみさせて頂くべきであろう。

ここで、神宮式年遷宮遷御の儀の翌日、奉幣の儀を終えられて、同夜午後七時より御神楽を奉奏されること、これ明治二十二年（一八八九）十月二日皇大神宮遷御の儀、同五日豊受大神宮遷御の儀のあと、翌日奉幣され、その夜御神楽を奉奏されたこと、これ、明治天皇の思し召しによること記しておきたい。宮中賢所で御動座のあった場合、御神楽を宮内庁式部職楽部）を差遣奉奏せしめられてよりのことであり、このとき宮内省雅楽部（戦後賢所と同じであり、明治天皇はこのようにされたのである。これについて、誤った説を記した向きもあることで、正しくと願って記させて頂いた。

次に昭憲皇太后について偲ばせて頂きたい。

昭憲皇太后は、日本赤十字社創建のあと、その総会に臨御、令旨を賜わること、度々であったが、ことに当時軍人が戦陣に馳せ、傷痍をうけつつも国のために尽したことに御心をよせられ、それに慈愛の情を示すこと、赤十字の大きな使命とされ、病院に金子を賜わったほか、日清戦争のころには、御自製の繻帯を、女官の調製したそれとともに寄せられたのである。また貧民の疾病を救済するため、病院を設立され、その総裁となられたこともあった。

昭憲皇太后は、明治十九年（一八八六）七月、華族女学校に行啓されたが、このとき、初めて洋服を召されて台臨せられたのである。そのあと、明治二十年（一八八七）一月、女子服制に関する思召書を賜わったが、そこに孝徳天皇の大化の改新のときの服制より、持統天皇の御代の朝服の制、元明天皇の御代の衣服の制、元正天皇の御代に左衽を改めさせられたことより、それ以降の服制の要を記され、それより女服の改良に言及されている。そのあと、華族女学校の生徒に洋服を着用させられたが、その服装の華美に流れることを戒め、服地、型式を制限されたのである。

明治の精神、それを如何うけとめさせて頂くべきか。その根底として、明治天皇の大御心、昭憲皇太后の思し召しを、正しく、広く、深くうけとめさせて頂くこと、明治聖徳記念学会の大きな使命とも考慮するのである。

（宮内庁侍従職御用掛・皇學館大学名誉教授）